DOBOKU偉人伝

江戸、明治、昭和と時代に合わせて姿を変えてきた東京のまち。
総人口100万人を超える世界有数の巨大都市に暮らす多くの人々の生活を支えた
インフラ整備とそれを手掛けた“人”にスポットをあてる。

第一回

玉川兄弟と玉川上水

江戸の暮らしを助ける玉川上水工事

まちの発展において水道の整備は必要不可欠のものである。いかに水を確保し、また制御するかは都市機能の維持において最重要課題といってもいいだろう。実際、江戸時代、幕府は飲料水の確保に苦しんだ。幕府は手始めとして神田上水を整備したが、まちの拡大とともに神田上水だけでは水の確保が難しくなっていた。水の需要が高まる中、幕府が注目したのは多摩川の水を江戸に引き込む一大プロジェクトだった。「玉川上水」と呼ばれる上水建設に尽力したのが庄右衛門・清右衛門の兄弟だった。

のちにその功績が認められ、「玉川」という苗字を与えられた2人は、羽村の取水堰で水を取り入れ、四谷大木戸までの全長43㎞の間を素堀で水を引く大工事を計画。提出

された計画書や絵図は幕府で検討され、1653（承応2）年、大工事に着手した。

羽村から四谷までのわずかな高低差をうまく利用し、水を自然流下させて水を通した上水工事。着手してから1年も満たないうちに完成したといわれているが、庄右衛門・清右衛門の出自は謎に包まれたままである。多摩地方の農民とも江戸の町人ともいわれており、またいつどこで土木技術を身につけたのかなども分かっていない。

なお、四谷大木戸に到達するころには、幕府から与えられた工事費用すべてを使い切ったとされている。2人は、自分の屋敷などを売り払い、残りの工事費をまかなったという。そして、四谷大木戸から江戸城の虎の門まで上水堀を完成させた。

羽村取水堰は投渡堰という非常に珍しい型式。川に直角に渡された鉄桁に杉丸太を立てかけ、横に差込丸太を設置。そだ（木の枝を束ねたもの）と、砂利等を用いて作られている。

江戸に一大上水網が完成

玉川上水は、四谷大木戸水番屋構内で万年石樋の暗渠に入り、分水された。数段重ねた石枡に木樋をつないで分水することで江戸城内をはじめ、麹町や赤坂などの武家屋敷、京橋川以南の町人地へ水が供給された。こうして京橋川を境に以北が神田上水、以南が玉川上水と役割を分担し、江戸に一大上水網が完成した。

「玉川」の姓を名乗ることが許された2人は、上水の管理も玉川家の世襲とすることが認められた。水道経営のために、水道を引いている武家・町方から水銀を徴収。幕府から管理を任された玉川家は、「御城水」を取り扱っていることもあり強力な権限を持つようになった。多摩川に設けられた上水取水用の堰を全面的に閉鎖し、上流から下る筏の通過を禁止するなど村人から反感を買うような措置を取ったこともあったようである。

江戸の一大プロジェクトとして完成された玉川上水は、明治に入っても市民の飲料水として親しまれた。昭和期に入り、一旦役目を終えたが、1986年、清流復活事業により流れが復活。竣工350年を迎えた玉川上水は、2003年8月、江戸、東京の発展を支えた歴史的価値を有する土木施設・遺構として、文化財保護法に基づき、国の史跡に指定された。

1986年東京都立川市幸町の玉川上水通水記念式典にて
玉川上水に流れが戻り、歓声を上げる小学生たち
（朝日新聞社 提供）

参考文献
・陣内秀信『水都東京ー地形と歴史で読みとく下町・山の手・郊外』ちくま書房 2020年
・伊藤好一『江戸上水道の歴史』吉川弘文館 2010年
・江戸遺跡研究会編『江戸の上水道と下水道』吉川弘文館 2011年